

立命館大学産業社会学部人間福祉学科開設記念式典

式典開会の挨拶

産業社会学部長 篠田 武司

一言ご挨拶をさせていただきます。本日はお忙しい中、人間福祉学科開設記念式典にご参集、ご列席いただきまして誠にありがとうございます。心から御礼申し上げます。本日は社会福祉士をめざす学生の実習を受け入れてくださった諸機関の方々、関連自治体の関係者の方々、学園関係者や学部の教職員、また産社校友会先輩諸氏、ならびに新学科の生徒となる学生諸君の参加をいただいております。

私、学部、学科を代表いたしまして、人間福祉学科がどんな学科をめざしているのか、これまでの産社の歴史をひもときながらお話し、挨拶に代えさせていただきたいと存じます。

産業社会学部は1965年、学部として出発いたしました。学部設置にあたって、私どもは学部の理念を、社会学を中心として経済学や政治学などを総合し、新しい社会科学を創造しながら、現実社会の諸問題を解決する、ということにおきました。現実社会が求める人間形成を、その中でめざすこと、それが私どもの教学の理念でありました。以後、産業社会学部は時代の変化に対応しながら、こうした理念をずっと現在まで引き継いできました。そして、今日、この式典を開催することになりました人間福祉学科もまたこうした理念を引き継いでおります。こうした教学の理念をもつ学部は、早くからその教学領域の重要な柱の一つとして福祉を位置付けてきました。

71年の学部改革が大きな転機でありました。この年の学部改革においては、それまでの6部門制から3部門制となり、その中の1部門として社会問題部門が設定されました。その中で、社会福祉、社会保障研究、社会病理学などの科目が展開され、本格的に福祉の教学が始まりました。時あたかも、福祉元年が政府によって宣言された年でもありました。しかし日本の場合、福祉元年を宣言したのはいいのですが、すぐその後、政府による福祉の充実政策は尻すぼみとなっていきました。したがって、福祉はこの時期、社会問題論として論じられるべき領域でもありました。こうした社会問題論として福祉をとらえるという考え方は、79年の学部改革にも引き継がれました。この改革で教学領域が産業・労働、生活・文化、社会問題の3つの部門に再編され、社会問題部門の拡充が一層図られました。

87年には、あらためて学部の大改革が行われ、4コース制が敷かれます。この改革では福祉教学も大きく変化することになりました。これまでの福祉を社会問題論として考えるという立場の上に

立ちながらも福祉教学において人間という側面を重視して新たな福祉教学を展開することになったからです。この時期、立命館大学全学で総合人間学科、総合文化学科などの立ち上げについて内々に議論されましたが、結局、そのような教学を主に産業社会学部教学の充実で対応することになりました。その中での4コース制への再編であり、福祉教学の領域にそれは実現していくことになります。その結果、あらためて福祉教学は発達・福祉コースとして再編されることになりました。したがって、この名称には、われわれが福祉を社会問題論的アプローチからだけ見るのではなく、新たに人間、そして心の面からも見ていくという新しい福祉を目指すコンセプトが込められています。いまでこそ、多くの他の大学あるいは学科がこうしたコンセプトで福祉教学を充実させようと努力されていますが、私ども、ある意味では日本の福祉のありようをこの時点ですでに先取りしていたと理解しています。このこと、学部としては誇りに思っております。福祉を人間の発達の側面からも捉えるべきではないか。それが新しい福祉のあり方ではないかということで発達・福祉コースという名称になりました。さらに、94年の学部改革では、6コースになり学部教学が全体として拡大すると共に、発達・福祉コースもさらに一層充実されました。そして、それが現在の人間福祉学科の基礎となっていきました。

このような学部の歴史的な経過を経まして、私ども、もう少し福祉の教学を拡充したい、そういう議論を改めて始めましたが、1998年のことでした。発達・福祉コースの学生諸君の学習意欲が非常に高い。そうした学生諸君に学部が何とかして応えていきたいと我々は真剣に議論を始めました。その当時、高齢化社会等々の問題が世界でも日本においても社会的にクローズアップされてきていました。それも見つめつつ新たな福祉職を担う人材を我々が育てる必要があるという議論の過程の中で、私たちは立命館大学における福祉教育はどうあるべきかを真剣に議論いたしました。当時、98年くらいから他大学でたくさんの福祉系の学部、学科がすでに生まれておりました。産業社会学部でのこうした学科構想の議論は、したがって遅きに失した感があり、学科構想としては全国的にはいわば後発組とっていい状態でした。しかし、後発組であればこそ他の大学にないものを作り上げなくてはならず、何が必要であるかということを実際に議論しました。

その中で我々は、社会から福祉を考える（社会問題論）、人間、心から福祉を見ていく（発達論）、この2面は引き続き重要な柱である、と同時に福祉環境そのものをどう作り上げるべきかを具体的に考えること（福祉環境形成論）もこれからの福祉のあり方を考えるとき決定的に重要だと考えました。もちろん、福祉のシステム自体をどう具体的にマネジメントしていくべきなのかを考えることは、当然の前提でもあります。このような総合的な視野とスキルをもった福祉社会を担う人材を育てること、それが私ども学部の議論の到達した結論でした。社会福祉システムのあり方の問題、人間の心を取り巻く問題、福祉が生きる環境作りの問題を考えること、これが新学科のコンセプトになりました。わたしども、我々が後発組であるがゆえに、この3本の柱をしっかりと立てることができたと思っております。こうして、真剣な議論の中から福祉環境、社会福祉マネジメント、発達臨床心理を課題とする3つのプログラムからなる新しい学科が誕生したわけです。

私たちは、福祉とはウエルフェアではなく、ウエルビーイングであると考えています。私たちは、

人間が人間として尊厳を持って生きていける，また暮らしていける，尊厳を持った存在として発達していく，そしてみずからが他の人と共に豊かに成長し，作り上げていける，そんな社会と人との関係，そういう状態こそウエルビーイングだと理解します。そういう状態をどう築けばいいのか。そのために何ができるのか，すべきなのか。人間福祉学科の3つのプログラムは，福祉をウエルビーイングと捉えた上で，それを追求するために不可欠だと理解し，設けたプログラムとなっています。そして，こうしたプログラムが可能であったのは，これまでの産業社会学部・産業社会学部教員の蓄積の大きさであったと思います。

こうしたコンセプトをもつ人間福祉学科がありますが，この学科で，ではどういう学生を育てようとしているのか。私ども，学生諸君に3つのことを身につけてもらいたいと考えています。一つは，なんといっても福祉はスキルが大事です。したがって技術を身につけてほしい，とくに福祉をコーディネートできる技術を身につけてほしい。もう一つは，福祉を取り巻く環境を，また人間全体を深い知恵を持って科学的に見る能力をつけてほしい。そしてなんといってもそれら支えるのは人が持つヒューマンイズムのマインド，心だと思いますが，そうした心を醸成してほしい。たんにいえば，スキル，認識力，ヒューマンイズムのマインドを持った学生諸君が人間福祉学科の中で育ててほしいと考えています。さらに福祉を担うにはパッション，情熱が必要です。それに支えられてこそ，先程の3つのポイントは生きてくると思います。したがって，私どもはスキル，認識能力，ヒューマン・マインド，パッションを持つ学生を育てたい。人間福祉学科はこの4月よちよち歩きをはじめたばかりです。学部としては，これから関係者の皆様方のあたたかいご支援を受けながら，よりよい福祉学科を作り上げていきたと思っています。どうぞよろしく，これからもご支援のほどをお願いいたしまして，私の挨拶とさせていただきます。どうも，ありがとうございました。

立命館大学 産業社会学部
人間福祉学科 開設記念式典
次 第

2001年7月7日(土) 於：以学館2号
司会進行：中 川 勝 雄(人間福祉学科教授)

記念式典

学校法人立命館代表挨拶	佐々木 嬉代三	副総長
産業社会学部代表挨拶	篠 田 武 司	学部長
来 賓 祝 辞	北 川 龍 市	京都市社会福祉協議会会長
	浜 岡 政 好	佛敎大学社会学部長
学 生 代 表 挨 拶	寺 田 幸 司	人間福祉学科1回生

記念講演

演 題：「これからの日本の社会福祉と
人間福祉学科に期待するもの」
講 師：真 田 是 立命館大学名誉教授